

〔気品の泉源、智徳の模範〕

福澤諭吉

青空文庫



左の一編は十一月一日、慶應義塾先進の故老生が懐旧会とて芝紅葉館に集会のとき、福澤先生の演説したるものなり。

老生の演<sup>の</sup>べんとする所は、慶應義塾の由来に就<sup>つ</sup>き、言<sup>げん</sup>少しく自負に似て俗に云<sup>い</sup>う手前味<sup>てまえ</sup>噌<sup>みそ</sup>の嫌<sup>きらい</sup>なきに非<sup>あ</sup>ざれども、事實は座中諸君の記憶に存する通り聊<sup>いさ</sup>も違<sup>か</sup>うことなく、且<sup>かつ</sup>つ今夕は内輪の会合にして他に憚<sup>は</sup>ばか所もあらざれば、過ぎし昔の物語も吾々には自<sup>お</sup>から一<sup>ひと</sup>しおの興味あるべし。抑<sup>そも</sup>も人間世界は苦中楽あり。今を去ること三十年、我党の士が府下鉄<sup>てつぽ</sup>砲洲<sup>うず</sup>の奥平藩邸を去て芝新<sup>しん</sup>銭座<sup>せんざ</sup>に移り、匆<sup>そう</sup>々一小塾舎を経営して洋学に従事したるその時は、王政維新の戦争最中、天下復<sup>ま</sup>た文を語る者なし。況<sup>い</sup>んや洋学に於<sup>お</sup>てをや。時論は攘<sup>じ</sup>夷の頂上に達し、洋学者の如<sup>ごと</sup>きは所謂<sup>い</sup>悪魔外道の一種にして、世間に容<sup>い</sup>れられざるのみか、又随<sup>したが</sup>つてその悪<sup>にく</sup>む所と為<sup>な</sup>り、時としては身辺の危険さえ恐ろしき程の次第なりしかども、人生の性質は至極剛情なるものにて、世人が概して自分等を敵視すれば、その敵意<sup>ぎ</sup>の盛<sup>さかん</sup>なる程に此方も亦窃<sup>まな</sup>に之に敵するの心を生じて、公然力を以<sup>もつ</sup>てするは固<sup>もと</sup>より叶<sup>かな</sup>わざる所なれども、心の底には他の無識無謀を冷笑すると共に、故<sup>こと</sup>さらに勉<sup>つと</sup>めてその言わざる所を言い、その好まざる所を行い、一切の言行を世論の反対に差<sup>さ</sup>向<sup>む</sup>けて意気劇烈、些<sup>さ</sup>少

も仮す所なく、満天下を敵にするの覚悟を以て自から居たるこそ一時の奇なれ。蓋し我党は夙に西洋文明の眞実無妄なるを知り、人間の居家処世より立国の大事に至るまで、文明の大義を捨て、他に拠るべきものなきを信じて、世の俗論、古論、保守論を悦ばざることなれども、その文明論の極端を公言して人心を激したるは、亦是れ人生の獸勇、鬪争を好むの情に出たることならんと、今より回想して自から悟る所なり。然りと雖もこの獸勇、決して無益ならず。当時我党の士は天下の俗論古論者に敵すると同時に、一方には彼等を網羅して之を論し、その古来徹骨の蒙を啓て我主義に同化せしめんとの本願なれば、四面暗黒の世の中に独り文明の炬火を点じて方向を示し、百難を冒して唯前進するのみ。兵馬騷擾の前後に、旧幕府の洋学校は無論、他の私塾家塾も疾く既に廃して跡を留めず、新政府の学事も容易に興るべきに非ず、苟も洋学と云えば日本国中唯一処の慶應義塾、即ち東京の新錢座塾あるのみ。世人は之を目して孤立と云うも、我れは自負して独立と称し、在昔歐洲にてナポレオンの大變乱に荷蘭国の滅亡したるとき、日本長崎の出嶋には尚おその国旗を翻して一日も地に下したることなきゆえ、荷蘭は日本の庇蔭に依り、建國以來會て国脈を断絶したることなしとて、今に至るまで蘭人の記憶に存すとの談あり。同志の士は是等の故事を物語りして、我慶應義塾は荷蘭の国旗を翻したる出嶋に異ならず、日

本の学脈を維持するものなりと、敢て自からその任に当りて、ますく新知識の輸入に怠らざる中にも、従前徳川時代の洋学は医術を始めとして、化学、窮理、砲術等、多くは物理器械学の辺を専らにしたるものを、慶應義塾は一步を進めて世界の地理、歴史、法律、政治、人事の組織より経済、脩身、哲学等の書を求めてその講読に着手し、現に英語に云うポリチカル・エコノミーを経済と訳し、モラル・サイヤンスを訳して脩身学の名を下したるも慶應義塾の立案なり。その他英語のスピーチュに演説の訳字を下して会議演説の趣意を説き、あらゆる反対論を排して今日世間に普通なる彼の演説法を教えたるも義塾にして、スチームを汽と訳し、コピライトを版權と訳したるも義塾の発意なり。凡そ是等を計れば枚挙に遑あらず。同志結合、力のあらん限りを尽して文明の一方に向い、一切万事その旧を棄て、新是れ謀り、以て日本全社会の根底より面目を改めんと試みたるその企望は、実際に於て固より微力の及ぶべき限りに非ず、唯是れ一時の空想に似たりしかども、爰に驚くべきは我日本国民の資質剛毅にして頑ならず、常にその固有の氣力を保つと同時に、慧眼能く利害の在る所を察して、王政の一新と共に民心も亦一新し、文明の進歩駸々として我党の空想を實にしたるのみか、却てその空想者の思い到らざる所にまで達して、遂に明治の新日本を出現したるこそ不思議の変化なれ、望外の仕合なれ。

前後の事情を回想すれば感極まりて唯涙あるのみ。畢ひつきょう竟きやう時運ときうんの然しからしむる所なりと云うも、素因そいんなくして結果はあるべからず。吾々は今日に居て只ひたすら管先人の余徳その遺伝の賜たまものを拝する者なり。左れば我党の士が旧幕府の時代、即すなわち彼の鉄砲洲てつぱうずの塾より新錢座しんせんざの塾に又今の三田に移りし後に至るまでも、勉強辛苦は誠に辛苦なりしかども、首こうべを回めぐらして世上うかがを窺がい、文明の風光次第あきらかにに明あにして次第に佳境に入るを見るは、畢ひつせい生せいの大快楽事ことにして譬たとえんに物なし。苦中樂ありとは即すなわち是れなり。然しかりと雖いえども人生の多情多慾たよくなる、殆ほとんど飽くことを知らず。今日の慶應義塾を見るに、その学事は凡およそ資金の許す限りに勉つとめざるはなし。否いなな、世間普通の官私諸学校に比すれば資力以外の事にまで着手して見るべきものありと雖いえども、天下の時勢、尚なお未いまだ独立の学校事業に可ならずして、經濟の不如意と共に学事も亦また不如意の歎なげを免まぬかれず。又教場の学事は殆ほとんど器械的の仕事にして、僅わずかに錢あれば以もつて意いの如ごとくすべしと雖も、我党の士に於おいて特に重んずる所は人生の氣品に在そり。抑そもそも氣品とは英語にあるカラクトルの意味にして、人の氣品の如何いかんは尋常一様の徳論とくろんに喋ちやうちやう々とする善悪邪正など云いう簡單なる標準を以て律すべからず。況いはんや法律の如きに於てをや。固もとよりその制裁の及ぶべき限りに非あらず。恰あたか孟子もうしの云いひし浩然こうぜんの氣きに等しく、之これを説明すること甚はなだ難かたしと雖も、人にして苟いやしくもその氣風品格の高尚なるものあるに非ぎざ

れば、才智伎倆ぎりようの如何いかんに拘かかわらず、君子として世に立つべからざるの事實は、社会一般の首肯しゅくわんする所なり。幸さいわいにして我慶應義塾はこの辺に於いざよて聊ささか他に異なる所のものを存して、鉄砲洲以来今日に至るまで固有の氣品を維持して、凡俗卑屈そしりまぬの譏まぬを免まぬかれたることなれども、元来無形の談にして、口以て言うべからず、指以て示すべからず、仏者の語を借用すれば以心伝心の微妙、義塾を一団体とすればその団体中に充満する空氣とも称すべきものにして、畢ひつきよう竟きやうするに先進後進相あいせつ接せつして無形の間に伝播でんぱする感化に外ならず。然るに今老生は申すまでもなく、座中の諸君も頭髮漸ようやく白いし。況いんや老少不常にして、先年すでに小幡仁三郎、藤野善蔵ぜんぞう、蘆野卷蔵あしの、村尾真一、小谷忍おたにしのぶ、馬場辰猪等の諸氏うしなを喪うしない、又近年に至りては藤田茂吉もさきち、藤本寿吉じゆきち、和田義郎よしろう、小泉信吉のぶきち、野本貞次郎さだじろう、中村貞吉さだきち、吉川泰次郎よしかわたいじろう氏等の不幸を見たり。蓋けだし人の死するは薪たきぎの尽るが如く、その死後の余徳は火の尽きざるが如しと云うと雖も、薪と火と共に消滅するの虞おそれなきに非ず。従前既に幾多の名士を喪い、今又老生と諸君と共に老却したり。自然の約束に従て次第に世を去りたらば、跡のこに遺いかにる壯年輩を如何いかにすべきや。壯年の活潑よ、能く吾々長老の遺志を継ぐべしと信ずれども、全体の氣品を維持して固有の面目まつとを全まうせしむるの一事は、特に吾々先輩の責任にして、死に至るまで之を勤なるも尚なお足らざるを恐るゝ所のものなり。吾々

の生前果して能くこの責任を尽し了りて、第二世の長老を見るべきや否や。之を思えば今日進歩の快樂中、亦自から無限の苦痛あり。老生の本意はこの慶應義塾を単に一処の学塾として甘んずるを得ず。その目的は我日本国中に於ける気品の泉源、智徳の模範たらんことを期し、之を實際にしては居家、処世、立国の本旨を明にして、之を口に言うのみに非ず、躬行実践、以て全社会の先導者たらんことを期する者なれば、今日この席の好機會に恰も遺言の如くにして之を諸君に囑托するものなり。

# 青空文庫情報

底本：「福澤諭吉著作集 第5巻 学問之独立 慶應義塾之記」慶應義塾大学出版会

2002（平成14）年11月15日初版第1刷発行

底本の親本：「時事新報」

1896（明治29）年11月3日

初出：「時事新報」

1896（明治29）年11月3日

※【】内の編者による解説は省略しました。

※底本の編者による語注は省略しました。

※初出時の表題は「演説大意」です。

※〔〕付きの表題は、底本編集時に与えられたものです。

入力：田中哲郎

校正：hitsuji

2019年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 〔気品の泉源、智徳の模範〕

福澤諭吉

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>